

石井方式に拠る幼稚園教育 井上 文克

私が初めて石井先生にお会いしたのは、昨年暮、十二月二十二日のことである。従って、爾来、今日まで、まだ三ヶ月しか経ってゐない。にも拘らず、今ではもう百年の知己のやうな気持ちで、先生の御指導を受けてゐるのである。

大阪ではかなり知られた幼稚園として「文化幼稚園」といふ名の幼稚園がある。この幼稚園の宮地武久先生が、ぜひ読むやうにと行って貸してくれたのが、石井先生の「私の漢字教室」と「一年生でも新聞が読める」の両著であった。これを読み始めた私は、覚えず最後まで一気に読み通してしまった。

読み終へると、すぐにも石井先生にお会いせずにはゐられない気持ちに駆られて、早速、長距離電話で先生に会見を申込んだ。すると、いつでも会ふといふ御返事である。私は、寸刻を惜しんで、直に伊丹の空港に車を走らせた。電話で会見を申込んでから三時間後には、私は、石井先生のお宅で、先生と向ひ合つて、親しく語り合ふことが出来たのである。

それから更に、数日を置いて、今度は泊り込みで、十分に先生のお

話を伺つた。私は、先づ、先生の教育に対する情熱と信念の強さに打たれた。と同時に、先生の驚嘆すべき努力を以てしても、今の公立学校の実情から観て、所謂石井方式を公立学校に普及させることは今が限度で、これ以上は不可能に近いことを直観した。

石井方式の普及は幼稚園にこそ在るのではあるまいか。とりわけ、私立の幼稚園では、公立の小学校と違って、いやしくも子供たちの為になることであるならば、何処の誰にも気兼ねなく、自由に実施することが出来る。そして、もしも石井先生の御主張通り、漢字が幼児に適した文字であつて、幼稚園在園中に、漢字がすらすらと読めるやうになるならば、その時には、小学校の教育も、勢ひ改めざるを得なくなるであらう。

さう考へた私は、その事を先生に率直に申上げた。先生は直に了解して下さつた。そして、その後も懇談を重ね、年の改まった一月の二十日には、私の幼稚園において戴き、園児に討する実地指導と、石井方式の解説とを、願ひすることになつたのである。

私は、先生の著述を拝見して、漢字が、幼児にとって少しも難しい文字ではないことを、知識としては十分に理解してゐたのであるが、さて現実に、目の前で、自分の幼稚園の子供たちが、相当に難しく思はれ

るやうな漢字を、平気で次から次へと読みこなして行くのを見せつけられると、まるで嘘のやうに、又、魔法でも見るやうな気持で、唯々驚嘆する思ひであった。先生は、お伽噺をしながら、その中に出て来る、登場人物や物の名前、主な言葉などを、園児たちの見守る中で、黒板に書き付けて行く。勿論、それは、子供たちが今までに見たことのない漢字である。その漢字は、その後、その言葉が重ねて使はれる度毎に、いつも先生の手によって指し示されるだけで、漢字についての格別の説明は全くない。かうして、物語が終る頃には、黒板は二、三十の漢字（その中には、“昔、お爺さん、お婆さん、山、川、柿の木、赤い、大きい、実、女の子、都、風船、雨、鳥”などがあつた）で埋まったのである。

さて、お伽噺が終つて、先生が黒板の漢字を指きすと、もう園児たちは、それらの漢字を皆覚えてしまつてゐて、何のためらひもなく、元気な声で正しく読む。二、三十もの漢字を、どれも間違はずに読むのである。それは正に感動的な、実に驚嘆すべき光景であつた。

この光景は、この日、この会に招待されて出席した大阪市内の幼稚園長たちには、真に肝に銘ずる驚異であつたに違ひない。早速、「こんなにすばらしい教育は、直にも採用したい」といふ希望が、参会した園長たちの間に、期せずして起つたのである。

それで、「石井先生の实地指導を、私の幼稚園でもぜひ」といふ希望が、後から後からと私の所に殺到し、そのため、二月から三月にかけて、石井先生の休みなき指導行脚が続くことになつたのである。

お蔭で、二月末の現在、大阪市及びその附近で、合計一万余の園児を擁する四十余の幼稚園が、そろつて、この四月から石井方式を実施すべく、唯今準備中、……といふ所にまで発展したのである。

(以下略)

(国語問題協議会会報「国語国字」第四五号所載)